

第2章 庄・蔵本遺跡・西病棟新営その他電気設備 工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

第1節 調査の概要

徳島大学蔵本地区では、西病棟建設にかかわる電気設備工事をおこなうこととなり、埋蔵文化財の発掘調査が必要となった。調査面積は103m²である。調査期間は、2008年1月9日から2月14日である。調査は徳島大学埋蔵文化財調査室（室長 定森秀夫総合科学部准教授）が担当した。現場の担当者は中村豊（大学開放実践センター助教）で、板東美幸（施設マネジメント部技術補佐員）がこれを助けた。

第2節 既往の調査

国立大学法人徳島大学蔵本キャンパスでは、こんにちまでに、22次にわたる調査を実施している（第2図）。すでに、今までの調査で、弥生時代前期を中心に全国的にも注目される成果を蓄積してきている。たとえば、第6次調査では弥生時代前期の墓域を調査し、第1～3、15次調査では貯蔵穴、土坑群を調査している。さらには第5・7・9・10・13・16次調査では用水路網、第17次調査では水田跡と、弥生時代前期の集落像を、ほぼ復元しえるほどの成果をえている。今回の調査地点は、その第22次調査に相当する（第2図22）。

第3節 調査の成果

本調査では、2枚の遺構面を調査した。また、第1～第2遺構面の間に、明確な遺構面を形成しないながらも個別に土坑4基を検出した。以下、順に成果の概要を述べることとする。以下、遺構番号は、今後の資料整理の混乱を避けるために、現地においてつけた名前をもちいることとする。

（1）基本層序

庄・蔵本遺跡では、表土（明治前期の陸軍第43連隊創設に伴う造成土および、戦後の大学病院整備に伴う整地層）下に、近代の水田層（青灰色粘土層）、中世～近世の水田層（緑灰色シルト層）、弥生時代前期末～中世の土壤化層（黒褐色シルト層）の堆積がみられるが、本調査区では近年の攪乱が多かったため、これらの層はあまり残っていなかった。第8図は、上記以下の層について示している。

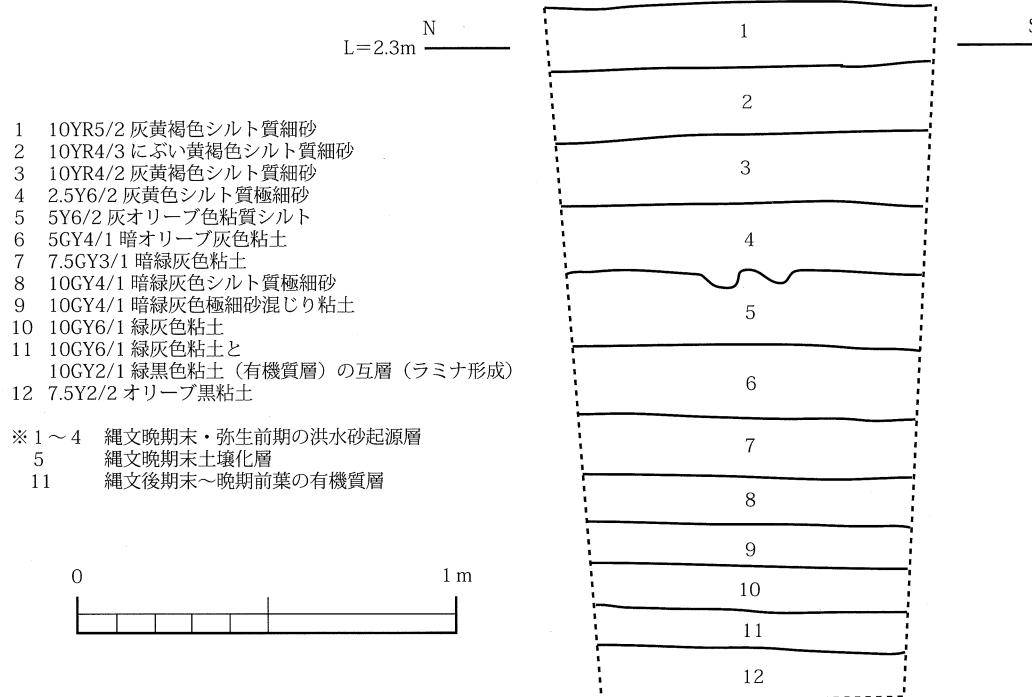
第1層上面が第1遺構面である。ほかの調査地点では、この遺構面では、弥生時代前期末～中世の遺構を検出する。しかしながら、本調査地点では、縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭からの、より、古い時期の遺構を含んでおり、他の地点よりも早く微高地化したものと推察される。

第1層～第4層は、縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭の洪水砂起源層である。第5層の灰オリーブ色粘質シルトは、土壤化が進行しており、微高地形成直前の旧地表面であったと推察される。他の地点との比較から縄文時代晩期末ごろの層と考えられるが、出土遺物が認められない。第9層以下はグライ化した粘土層が堆積しており、第11層は庄・蔵本遺跡一帯にみられる、縄文時代後期末～晩期初頭ごろに形成されたと推察される有機質層である。

（2）第1遺構面

第1遺構面では、縄文時代晩期末・弥生時代前期の土坑7基（SK01～SK04）、古墳時代中期の溝1条（SD02）、近世の溝1条（SD01）、および時期不明のSX01を検出した（第9図上）。

以上のほかにも、第1遺構面から第2遺構面へ向けて、縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭ごろの、洪水砂を起源とする遺物包含層を掘削中に、明確な面を形成しない土坑4基（SK01下層、SK02下層、SK05、SK07）を個別に検出した。



第8図 土層模式図

（3）第2遺構面

縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭の土壌化層である、暗褐色粘質シルト層の上面において、当該期の溝状遺構1条（SD03）を検出した（第9図下）。遺物は出土していない。

第4節 出土遺物の概要

今回の調査では、狭い調査面積ながら、コンテナ5箱分の資料が出土した。その大半はSK01、SK02、SK03からの出土である。

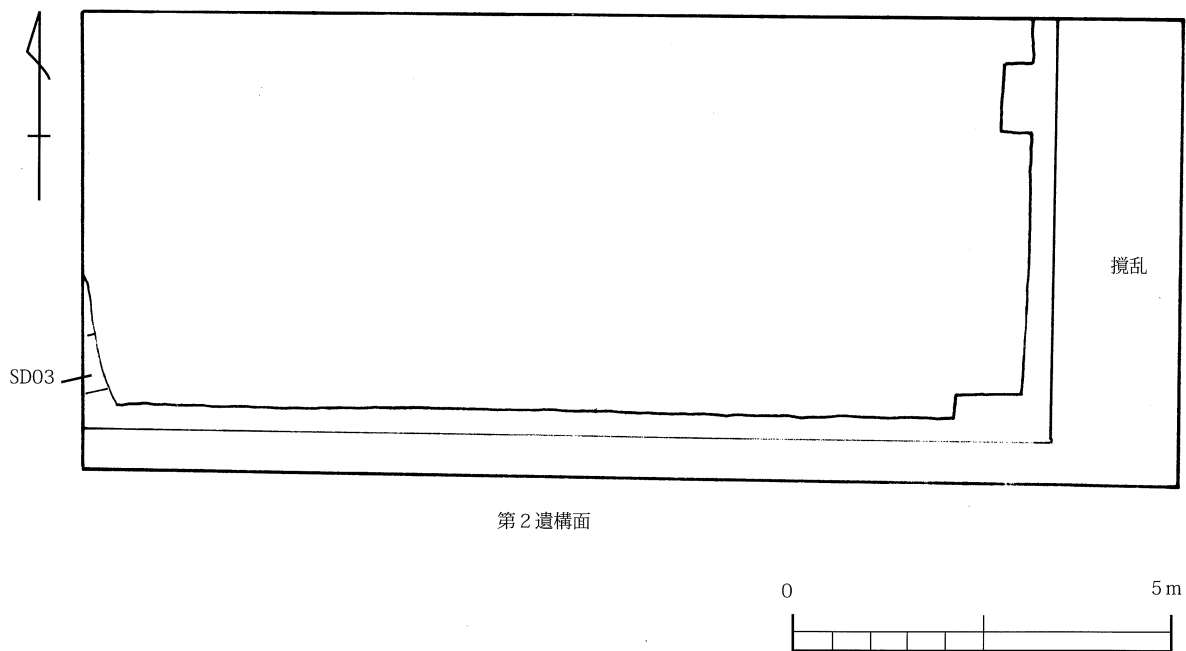
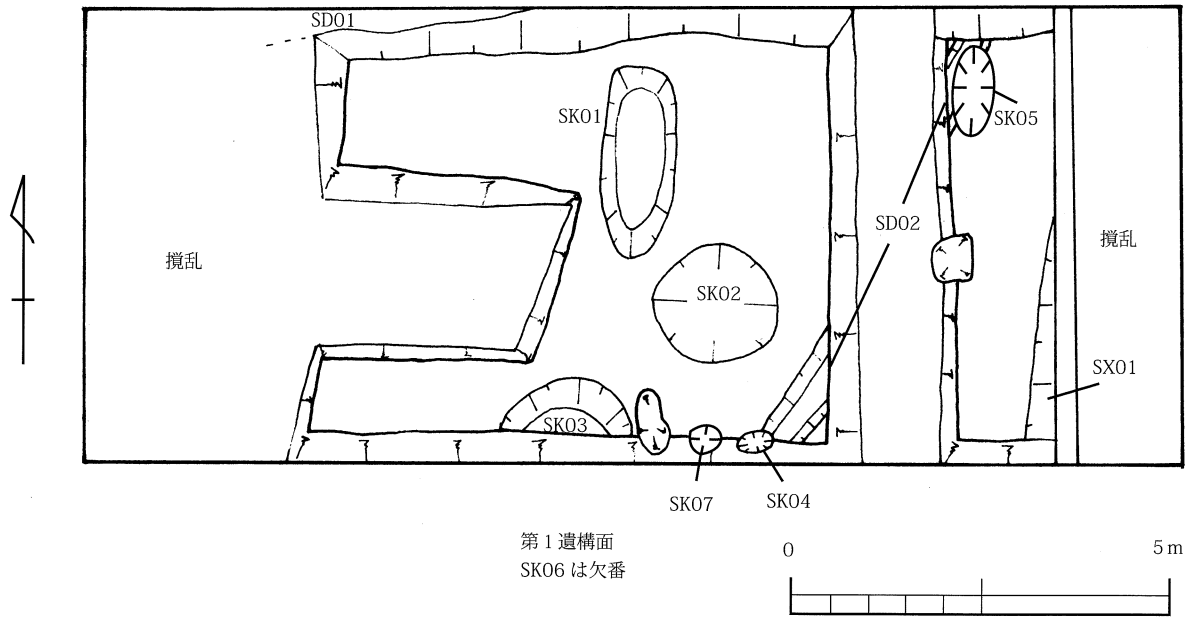
SK01出土の土器は、弥生時代前期末のものである。SK02・SK03の出土土器は、縄文時代晩期末・弥生時代前期初頭の土器である。SK02からは、遠賀川式土器の壺に流水文の原型ともいえるべき文様をもった土器が出土した。SK03からは、あまり残りのよくない小破片ばかりではあるが、弥生時代前期初頭の土器に伴って、縄文時代晩期末の凸帯文土器が出土している。その他石器が若干出土している。

（1）SK02出土土器

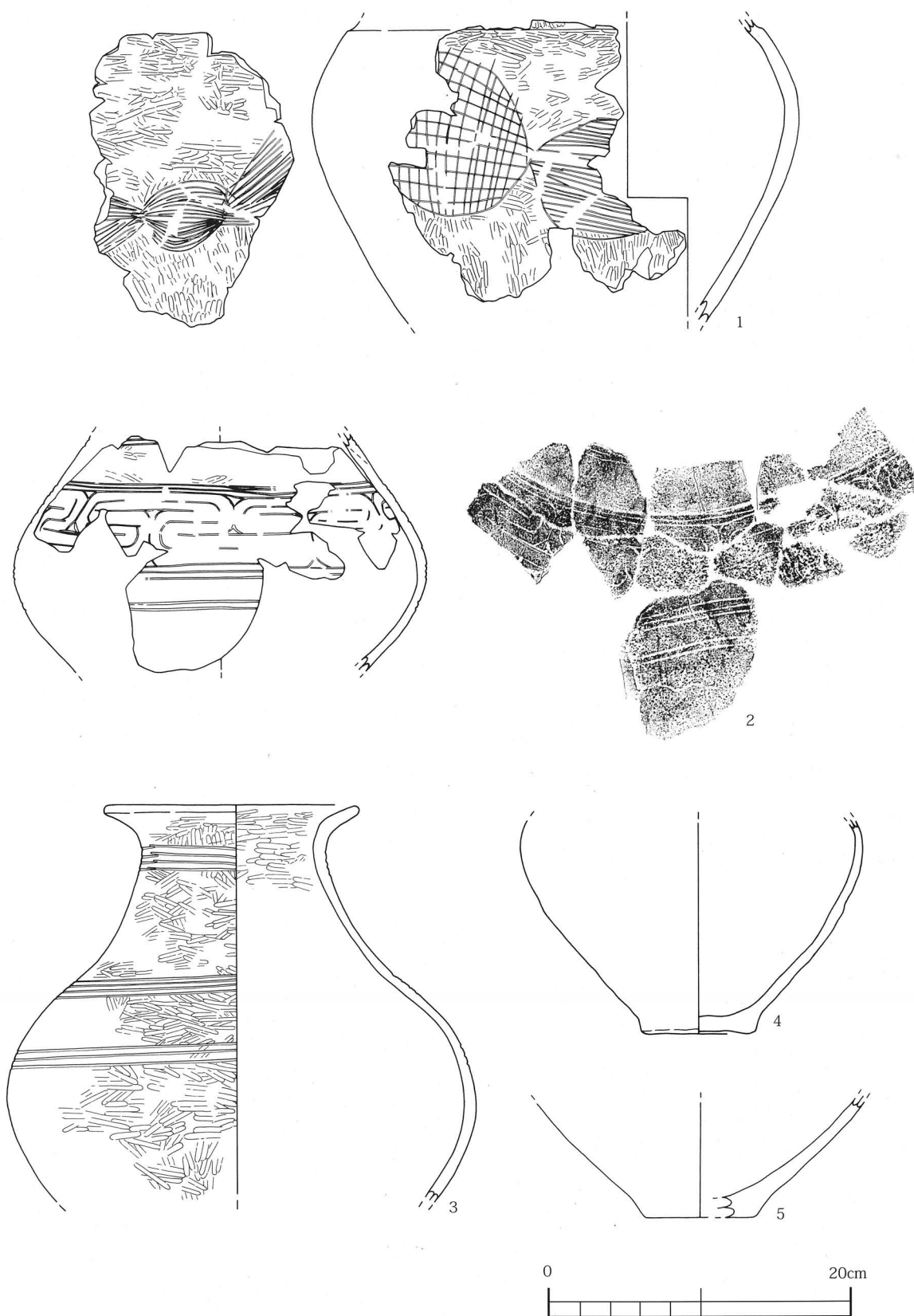
ここでは、貴重な類例となった土器の出土した、SK02出土土器について、やや詳しくみていきたい（第10・11図）。

第10図1は壺の頸部～胴部片である。頸胴部界に段を有し、胴部に細いヘラ状工具による稚拙な文様を施す。

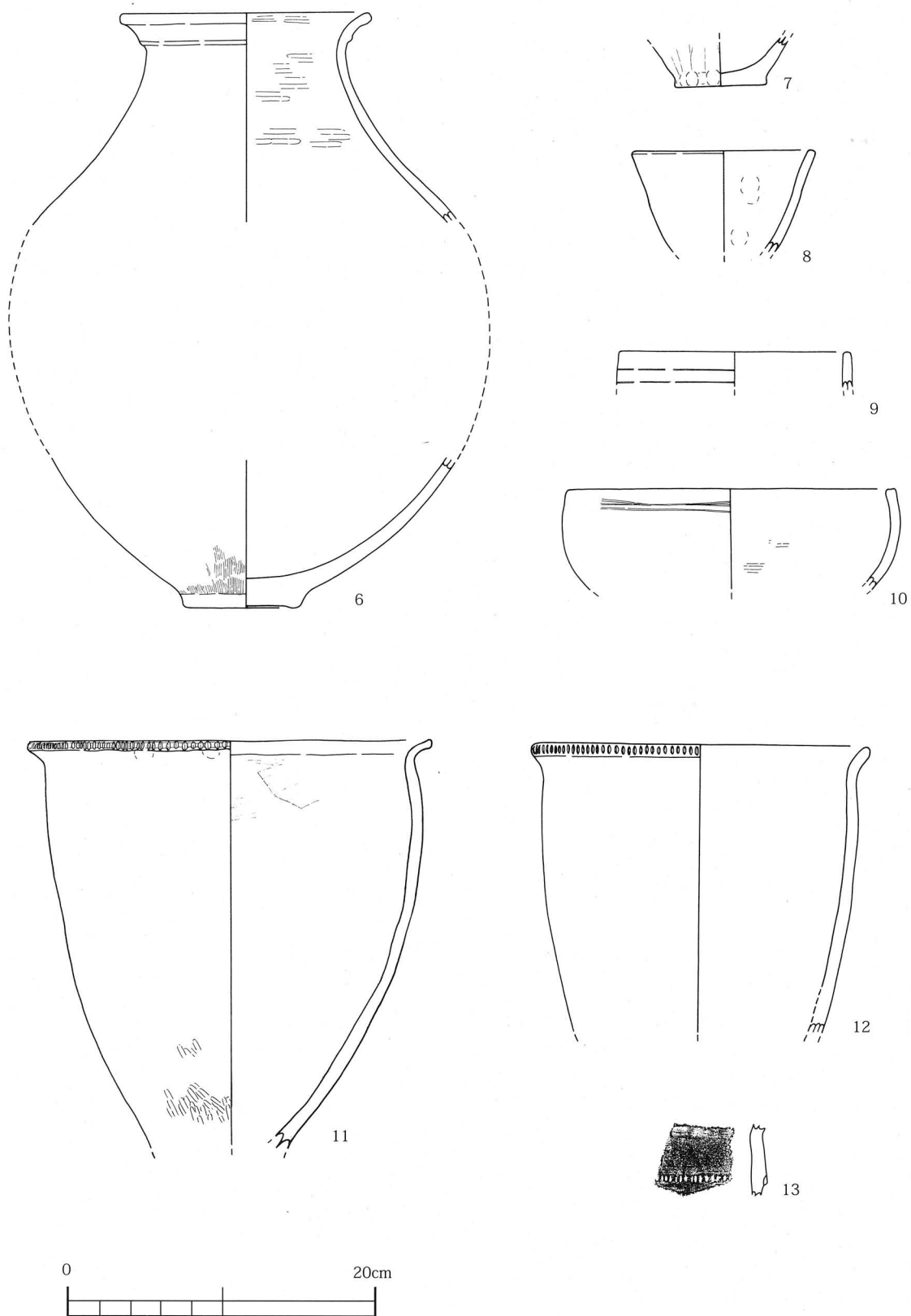
同2は壺の頸部～胴部片である。風化が進んでおり、文様の観察は困難であった。頸部に細いヘラ状工具による沈線2条を施す。頸胴部界に段を施す。このとき段部に縁取沈線を施す。段下部にも2条の沈線を施す。胴部最大径付近に3条の沈線を施し、そのやや下部にも2条の沈線を施す。段下の沈線と胴部最大径付近の沈線内部に文様をもっている。文様は、ヘラ描き沈線による横型流水文を描いている。



第9図 遺構平面図



第10図 SK02出土土器



第11図 SK02出土土器 2

文様の上部の区画沈線に、等間隔に縦位の短沈線を施す。次いで下部の区画沈線にも、上部の短沈線の間地点に、上下交互になるように縦位の短沈線を施す。この上下の縦位の短沈線の先端部に、上下の区画沈線に平行する短沈線を描いていく。つぎに縦横の沈線の交点部分に三角形の区画文を施す。区画沈線とその上下の沈線は2ないし3条単位を基本としているので、これにあわせるかのように、上記の文様の中間のスペースに、1条のヘラ描き沈線による流水文を施して横型の流水文を完成させている。

同3は壺である。頸部と頸胴部界、胴部最大径付近の3か所に、細いヘラ状工具による3条の沈線を施している。同4・5は壺の底部である。

第11図6は壺である。口頸部界に段を施している。同7は小型の壺底部である。同8は無文の鉢である。頸部付近で若干外反して立ち上がる。同9・10は碗状の鉢である。ともに、口縁部に細いヘラ状工具による沈線を2条施している。同11は甕である。如意形口縁をもち、口縁端部を刻んでいる。胴部は無文で、やや内湾気味の器形である。同12も甕で、11と同じく如意形口縁をもち、口縁端部を刻んでいる。胴部は11ほど内湾せずに、直線気味に立ち上がる。同13は甕の頸部～胴部片である。頸胴部界に段をもっており、段上に刻みをくわえている。

これらの土器群は、庄・蔵本遺跡の弥生前期土器では最古の部類に属している。壺には段を有するものがある。段も、第11図6のように、口縁部の立ち上がりが短く、徳島市三谷遺跡（勝浦編1997）の例に類似している。2の流水文は、三谷遺跡にみられる有文土器（勝浦編1997）に関連を持つものと推察される。また、ヘラ描き沈線も細く繊細で、古い様相を止めている。鉢も多くみられ、浅鉢の多い縄文土器のセットを色濃く残している。甕には頸部に沈線を施したものがみられない。第11図13のように頸胴部界に段を施したのもみられる。庄・蔵本遺跡でも、これまでにこれらと同様の特徴をもった土器は断片的には出土しているものの、土坑一括資料として良好なセット関係の把握できる資料では初見である。

第5節 まとめ

今回の調査地点では、蔵本キャンパス内で最古の部類に入る、縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭の遺構を検出した。すぐ東に隣接するボイラータンク敷設に伴う立会調査（1998年）において、弥生時代前期初頭の配石墓を検出している。また、キャンパス東側に隣接する県立中央病院新病棟建設に伴う発掘調査において、当該期の遺構・遺物を、徳島県埋蔵文化財センターが検出している。それらのことから、今回の調査地点は、付近でも土地の安定化がいち早く進んでいた地区であったとみてよいであろう。縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭は、やや湿った環境にあると推察される暗褐色シルト質粘土層が相当の面積で広がっており、居住適地は少なかったとみられ、今回の調査地区は数少ない安定地であったとみられるのである。

今回は、SK02出土土器について、少し詳しく取り上げた。SK02出土土器は、上で述べたように、庄・蔵本遺跡出土の弥生前期土器では、もっとも古い様相をもっているといえる。すなわち、壺には段がみられ（第10図1・2、第11図6）、口頸部界の段から口縁部があまり長く延びない特徴をもっている（第11図6）。壺にはヘラ描きの沈線がみられるが、細く繊細な線である（第10図1～3）。甕には頸部の沈線がなく（第11図11・12）、頸胴部界に段をもったもの（第11図13）もみられる。器種構成に、鉢の占める割合（第11図8～10）が高く、縄文時代晩期の様相をよくとどめている。

なかでも、流水文を施した壺（第10図2）は注目される資料である。従来弥生時代前期の流水文は、前期前葉には、骨角器や木器に施され、前期中葉～後葉になって土器にみられるようになると考えられていた（深澤1989）が、第10図2は前期前葉にさかのぼる類例となった。また、本例は陽刻表現であり、縄文時代の工字文の施文原則を踏襲しているが、陽刻部のえぐりはすでに失われている。さらに、2ないし3条を1単位とする沈線による文様構成をとることにより、弥生時代前期後葉以降に顕著となる陰刻表現への指向性も認められる。

SK02には第11図6や同13のように、徳島市三谷遺跡（勝浦編1997）に類例の認められる土器も出土している。三谷遺跡や同市南蔵本遺跡では、工字文を模したような有文土器が多数出土している。このな

かには、明確に流水文の構成をとるものはみられないが、参考となる浮線文土器は出土している。また、高知県居徳遺跡からは、東北地方の大洞A式土器の搬入品も出土しており、地理的背景からは、徳島地域の作り手が、大洞A式の工字文土器を直接参照する機会をもったとしても不思議ではない。

西日本における縄文時代晩期末の土器群は、基本的には文様を失う方向性にある。しかし、山陰（鳥谷編2000）や徳島など、一部地域には有文土器の発達が見られるところもある。流水文土器は、西日本のなかでも、縄文時代晩期末に、北陸・中部～東北地方の文様要素を積極的に導入し、有文土器を発達させる背景をもつ地方において、古相の遠賀川式土器に導入されていたものではなかろうか。

文献

勝浦康守編1997『三谷遺跡』徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会

深澤芳樹1989「木葉紋と流水紋」『考古学研究』36—3, p39—66.

藤方正治・曾我貴行2002『居徳遺跡群Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書69

鳥谷芳雄編2000『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ 三田谷Ⅰ遺跡Vol.3』鳥根県教育委員会



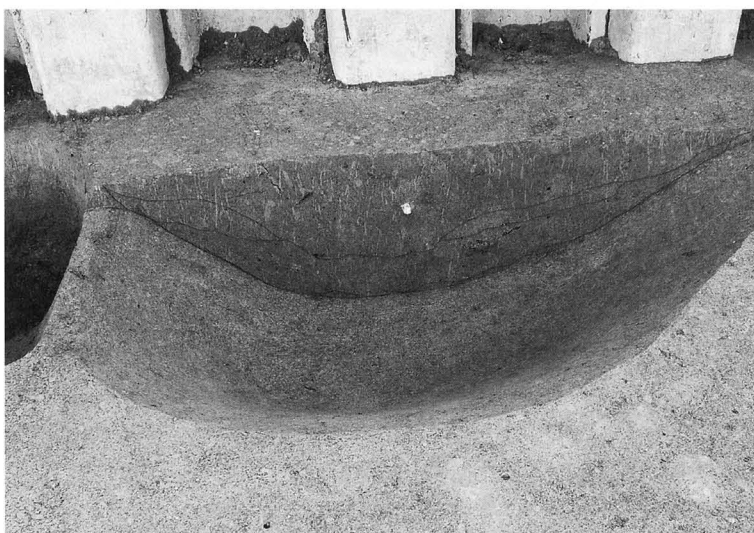
重機掘削



作業風景



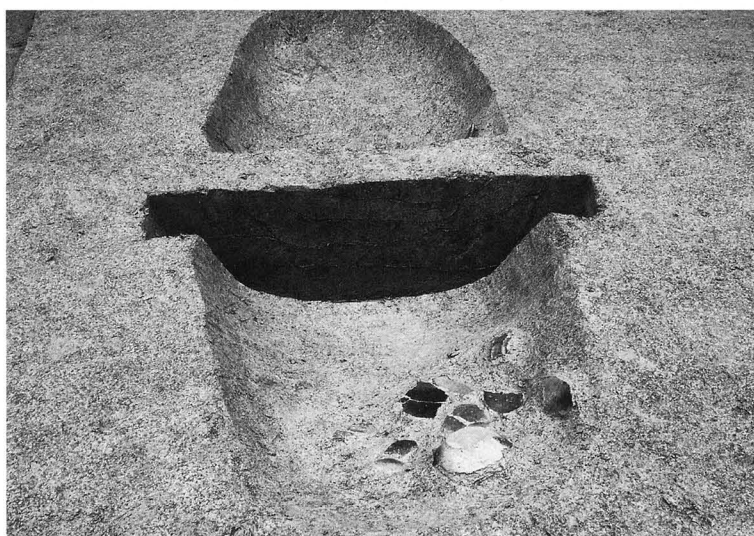
第1遺構面全景



土坑 SK03



土坑 SK07



土坑 SK01



土坑 SK02



土坑 SK02



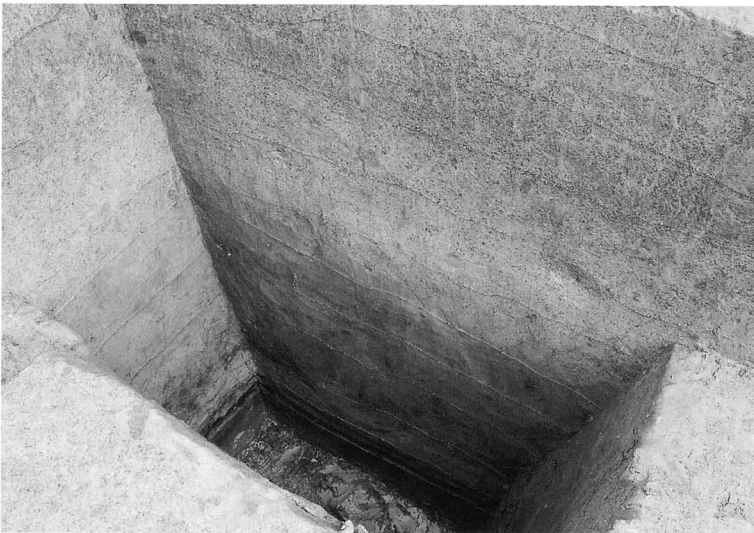
土坑 SK02



完掘



土層 1



土層 2